

論考部門

おもてなしと建築

〈2016年7月〉

藤森照信

“おもてなし”というテーマで原稿を依頼されて引き受けたのは、いちおう心づもりがあったからだ。

田舎の実家を舞台に、諏訪大社の“御柱（おんばしら）”の来客のおもてなしが、やってみると意外に充実した時間であったし、また茶室に関心があり、作ったり書いたりしてきたから、そのあたりのことを述べよう。

しかし、原稿用紙に向かい、“おもてなし”と建築の関係について考え始めると、次から次へと事例が浮かんできて、ついには、“建築とはそもそもおもてなしのために作られ、発達してきたのではないか”という、思いもよらぬ結論に導かれた。

この結論に至ってから、自分が学生時代から受けてきた住宅建築のあり方について教育と歴史的実態の齟齬に気づき、その齟齬がむしろ新鮮だった。

機能的で合理的な暮らし方を容れる家族本位の平面こそ住宅の肝所と教えられ、自分もそのとおりと考えてきたのに、日本の住宅建築の数千年の歩みを見ると、そんなことはウソッパチというか戦後のごく短期間の話で、人間は営々と他人をもてなすことを第一に、別の言い方をすると他人の目を強く意識して、住いと建築を発達させてきた。

20世紀のモダニズム建築のほうが、歴史的には異例にして特例なのである。

なぜ、そうした常ならざる思想を20世紀建築が持つことになったのか、その理由を考えねばなるまい。

原稿を依頼されなければ、こんなことは考えることもなかっただろう。

おまけに賞までいただいて感謝しきり。



藤森照信 ふじもり てるのぶ

1946年長野県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。建築史家・建築家。現在、東京都江戸東京博物館館長・東京大学名誉教授・工学院大学特任教授。1986年『建築探偵の冒険・東京篇』でサントリー学芸賞、1998年日本近代建築史の研究（『明治の東京計画』および『日本の近代建築』）で日本建築学会賞（論文）、2001年〈熊本県立農業大学校学生寮〉で日本建築学会賞（作品）を受賞。2017年『藤森照信展 自然を生かした建築と路上観察』（水戸芸術館、9/29～12/3広島現代美術館へ巡回）。近著に『藤森照信の茶室学』（六曜社）『日本建築集中講義』（淡交社）『藤森先生茶室指南』（彰国社）。建築作品の近作に〈たねや ラ・コリーナ 草屋根・銅屋根・栗百本〉（近江八幡市）〈モザイクタイルミュージアム〉（多治見市）。

論考部門

建築は、みんなで“つくる”
— パパ、あの建物つくってんで。
全部やないけどな…。 —

〈2016年11月〉

村上陸太

弊社所属の編集メンバーから、「構造を支える人と技術のつながり」という特集の総論をお願いします、と依頼され、軽い気持ちで「いいよ！」と答えてしまったのが始まりです。

よく考えると、自分を今まで支えてくれた仲間達を紹介する特集の最初に、主旨に合わせて、広く人や技術について述べる事が必要で、「こりゃ、責任重大や」と痛感しました。そして、本総論の後に続く、仲間達の技術力の高さや熱い想いが、上手く伝える露払い役を果たそうと考えました。

流れとして、私と同じ構造設計者だけではなく、構造設計業務を知らない読者の人達にも共感してもらおうという気持ちで、構造設計の業務手順を紹介しながら、それぞれの分野でお世話になった仲間達に感謝する、という形にしました。また、題については、“つくる”という平仮名で建築生産を表し、読者に共感してもらえるような副題もつける事にしました。

執筆中は、それぞれの分野毎に、お世話になった仲間達の顔が頭に思い浮かび、あんなこともあった、こんなこともした、と考えていると、中々原稿が進まない時もありました。でも、その頭に浮かぶ仲間達が、「うまく書けよ」と励ましてくれている気もしてきて、何とか締切に間に合わせる事ができました。

本小論が、受賞につながったのも、本特集を考えてくださった編集の方々や、何よりも、特集各分野の論文を書いてくれた仲間達のおかげだと思っております。結局、いつでも仲間達に支えられている自分というものを感じています。

本当にありがとうございました。

また、これからもよろしくお願いいたします。



村上陸太 むらかみ りくた

1958年6月大阪市生まれ。
天王寺高校、京都大学・大学院修士課程を経て
1983年4月 ㈱竹中工務店入社。
1986年4月 大阪本店設計部構造部門
2012年4月 大阪本店設計部構造部長
2016年3月より技術本部長
受賞歴
第10回 日本免震協会賞作品賞 シスメックステクノパークR&Dタワー
主な構造設計作品
海遊館、ユニバーサルスタジオジャパン、六甲の集合住宅Ⅱ、
大阪文化館・天保山（旧サントリーミュージアム天保山）等